

オリジナル小説動画の創作

(1年国語総合・3年国語表現)

——動画・静止画・BGM等の芸術的演出を加えた
オリジナル小説動画を創作する——



授業のねらい

- ① 工夫しながら作品をゼロから創作する楽しさを実感する
- ② 知識・表現力・芸術的感性を養い、動画編集技術を身につける

4月以降、国語総合と国語表現の授業では様々な小説や古典作品を扱ってきましたが、その度に生徒たちは「内容が深い」「表現が豊かだ」といった感想を述べていました。そして今回思い切って、自分自身で小説を書き、それに様々な演出を加え、オリジナル小説動画を創作することにしました。活動を通して、様々な知識や表現力、芸術的感性を養い、動画の編集技術を身につけることがねらいです。

とても難易度の高い活動になりますが、どこまで出来るか、皆で挑戦したいと思います。

授業の流れ

(1) 構想を練る



(2) 内容に関連する事柄を調べる



(3) 小説を書く



文学

まずは、話をどのような内容にするのか、どのような人物を設定するのか、どのような構成にするのかなど、一人一人が構想を考えることにしました。

小説を書くといっても、生徒たちは誰一人、小説を書いた経験などありません。最初は頭を抱え、途方に暮れていた生徒たちでしたが、少しずつ時間が経つにつれて、紙とシャープペンを手に取り、構想を練り始めました。

地理、生物、統計等

日本海沿いのある港町を舞台にしたミステリー小説、蝶の生涯を描いた物語、おでんを主人公にした話など、生徒たちは実に多彩な構想を練っていました。

ただ、いざ文章を書こうとしても詳しい知識がないと書けるものではありません。生徒たちは、本やパソコンを使って、日本海沿いのある町の産業や地形、蝶の生態など、小説の内容に関するいろいろな事柄を調べ始めました。コンビニでどのおでんが売れ筋なのか、どんな配置で売っているのか、実際に調査に行った生徒もいました。

文学

一人一人が自らの構想や知識をもとにしながら、タブレットの文章作成ソフトを使って小説を書き始めました。字数制限は特に設けませんでした。1300字を目安にすることだけを伝えました。

しかし、構想や知識があっても、それを生きた言葉として文章化するのは至難の業です。授業が何コマあっても、あっという間に過ぎていきます。

それでも生徒たちは、時には自分の世界に入り込み、時には周囲に意見を求め、慎重に言葉を選びながら、一步一步進めていきました。ある生徒が友人に熱弁していた「ただ伝わればいいというものではない!」という言葉がとても印象的でした。

(4) 演出素材を集める



(5) 動画を編集する



(6) 発表会



授業の成果

- ① 「これは終わらないかもしれない…」とつぶやいていた生徒も、最後まで諦めず、楽しみながら完成させることができ、皆が充実した時間を過ごすことができました。
- ② 作品づくりを通して、知識・表現力・感性・動画編集技術など、一人一人が様々な力を高めることができ、また、表現を推敲することの大切さを実感したと思います。

芸術

小説の執筆と合わせて、小説を効果的に演出する素材（フリー画像・BGM等）を集めていきました。小説と同様、演出素材もそれぞれの生徒の感性が活かされていました。また、集めるだけでは満足しなかったのか、個人のスマートフォンで写真を撮ったり、風景を録画したりする生徒もいました。

なかには、休日に仁風閣や鳥取砂丘など市内各所に家族と出掛けて写真撮影やビデオ撮影をするなど、非常に本格的な動画作りを目指す生徒もいました。

テクノロジー

図書館のタブレットに加え、個人のスマートフォンや iPad を活用し、動画編集アプリで小説と様々な演出素材を組み合わせながら、動画作品を創作しました。

過去に動画編集アプリを使って動画を編集したことのある生徒たちもいたため、経験のない生徒は経験のある友人からアプリの使い方を教えてもらいながら創作しました。（臨時休校の影響で編集が間に合わなかった生徒や、動画編集はあまりにもハードルが高いという生徒は、今回は静止画など自分の出来る形で創作し、また改めて動画に挑戦することになりました。）

一人一人が自らの思いのこもった作品を発表しました。機器の操作も作者自身で行いました。自動読み上げ機能に頼らず、あえて地声で朗読する生徒もいました。力作ぞろいであって演出も個性的でももちろん素晴らしかったですが、何よりも驚いたのは、人物のセリフや情景描写など、言葉の使い方が皆とてもうまく、たまたま見に来られたある先生が「言われるまでオリジナル小説だと気づかなかった」と感心されたほどでした。

当初は、発表の際に Google Forms で相互評価を行う予定でしたが、時間の都合により省略せざるを得なくなりました。それでも生徒たちは互いの作品を食い入るように鑑賞し、拍手を送っていました。